

手軽で効果の高い開発基盤の作り方

《ローリスクで大きな効果 地域で みんなで 誰でも》

PRODEFI モデル紹介資料

セネガル総合村落林業開発計画プロジェクト

(PRODEFI)

2004年8月

PRODEFI モデル紹介資料 目次

はじめに

1. PRODEFI モデルの概要
2. PRODEFI モデルの潜在的ユーザー
3. PRODEFI モデルの研修の特徴と効果
 - 3-1 PRODEFI 研修の特徴
 - 3-2 PRODEFI 研修の効果
 - 3-3 選別型研修との比較
4. PRODEFI モデルの実施ステップ
 - 4-0 PRODEFI モデルの適用の前に
 - 4-1 第1ステップ：PRODEFI 研修実施
 - 4-2 第2ステップ：研修効果の持続と補強のための措置
 - 4-3 PRODEFI モデルの有効性
5. PRODEFI モデルの実践の流れ
 - 5-0 プロジェクト対象住民への説明
 - 5-1 ニーズ分析
 - 5-2 研修計画策定
 - 5-3 研修準備
 - 5-4 研修実施
 - 5-5 新たに生じたニーズの把握と次期投入の決定
6. PRODEFI モデルの活用にあたって
 - 6-1 人口規模
 - 6-2 住民の機会費用
 - 6-3 組織化の難易度
 - 6-4 他の支援団体の存在

はじめに

セネガル総合村落林業開発プロジェクト (PRODEFI) では、2002 年にプロジェクトの方針を変更して以降、住民による自主的な天然資源の持続的な管理に効果のある開発援助の方法の開発に力を入れてきました。その結果、ファシリテーションなどの特別なスキルを必要とせず、援助団体のサイズや目的にかかわらず利用できる、コストパフォーマンスが高い方法論をまとめることができました。

この方法論は PRODEFI の短い活動のみで得られたものではなく、過去の多くの開発援助の経験を参考に PRODEFI が仮説をたて、その実証として効果の確認を行ったものです。研修を主体としたステージから入っていく方法論ですが、非常にコストパフォーマンスも高く、多くの開発援助の案件に、計画の大小を問わず導入できるものです。また他のコンポーネントと組み合わせて利用することも可能な柔軟な方法論です。

ただし本当に重要なのは「どのように実施するか」という形ではなく、「なぜこのように行うか」というエッセンスです。それは例えば地域住民に十分なオプションや判断材料を提供すること、地域のリソースへのアクセスを容易にすること、住民間のコミュニケーションを活性化すること、そして住民の参加意識を高めること、などです。

PRODEFI の開発モデルはいわばベーシック・モデルです。そのまま利用してもほとんどのケースで何らかの効果をもたらすことができると思います。ただし、どれくらい効果を高めることができるかは状況に合わせた工夫次第です。皆さんは皆さんそれぞれの状況に応じて工夫を加え、独自の応用を試みてください。

セネガル総合村落林業計画
チーフアドバイザー 野田直人

1. PRODEFI モデルの概要

PRODEFI モデルとは何でしょうか？

手軽で効果の高い開発基盤の作り方

ローリスクで大きな効果：地域で・みんなで・誰でも

PRODEFI モデルとは、住民が持っている活力を引き出し、その活力を、個人や組織の活動の活性化へつなげ、住民を「自分たちによる自分たちのための」地域の開発プロセスへと導入する手順を示すものです。ここでいう「地域」とは、1つの村であっても、村の一部であってもよく、村の集まりである郡や県など大小の行政区分であってもかまいません。PRODEFI では、活動単位を村とし、研修を始めとする活動を村レベルで繰り広げてきました。

PRODEFI モデルの全体像は、「研修という形で住民へのインプットを開始し、住民の反応を見て、次の支援活動を検討する」という非常に単純なものです。従来型のアプローチとの決定的な違いは、従来型モデルでは、それが参加型と呼ばれるものであっても、開発の全体計画を活動の開始当初に決めしまうものであるのに対し、ここに述べる PRODEFI モデルでは、最初の活動こそ研修と特定していますが、この研修は、「呼び水」であり、研修に対する対象住民の反応を見てから、その後の活動を検討することを原則とします。つまり、次の活動を決めるためには、「住民の反応」が必要であり、この「活動－反応」の繰り返しで、開発を進める推進力となるのです。

PRODEFI モデルの「呼び水」である「研修」も、これまでに多くのプロジェクトが行ってきたものとは、一味違います。それは、どのような研修なのでしょう？

PRODEFI モデルでは、「地域で」、「地域の講師を活用し」、「地域のニーズにあった」研修を、「参加者を選別せず」、「多数を対象に」実施する

PRODEFI モデルの研修を実施することにより、研修実施者はローリスクで大きな効果をあげることが可能です。また、研修参加者である住民の中にも、研修後、様々なプラスの変化が生まれることが確認されています。

本資料では、まず、PRODEFI モデルの研修の特徴と効果を、続いて、異なるタイプのプロジェクトで同研修が活用された際に生じる効果を取り上げ、次にモデルの実施ステップを説明し、最後に PRODEFI におけるモデルの実践例と活用の際の留意点をまとめます。

2. PRODEFI モデルの潜在的ユーザー

誰が PRODEFI モデルを活用するのでしょうか？

住民主体の自然資源管理活動や農村開発を目指す、個人や組織、プロジェクトのすべてが、PRODEFI モデルの潜在的なユーザーである

もし、あなたが、「住民と共に考え行動する」プロジェクトの実施を考えているのであれば、あるいは、現在、実施しているのであれば、この資料を読み、PRODEFI モデルの活用を検討してはいかがでしょうか。活動やプロジェクトのタイプ、セクター、規模は問いません。森林分野や水産分野のプロジェクトであっても、貧困削減、総合地域開発を目指すプロジェクトであっても、PRODEFI モデルの適用は可能です。この資料では、モデルの適用単位として「村」を想定していますが、前述のとおり、村の住民の一部をターゲットにすることも可能ですし、複数の村が集まった地区、さらには、セネガルの場合では、村落共同体 (CR : communauté rurale) や県など、もっと大きな範囲を対象とすることも可能です。また「PRODEFI 研修」というローリスク、つまり、低コストの研修を活動の中心に据えているため、資金規模の小さな住民組織や NGO でも適用可能ですし、ドナーや政府機関などの大型組織が活用しても、これまでのアプローチと比して、ローリスクで大きな効果が得られます。



フィルギ地区 メディナ・ンダウエン村での研修風景

3. PRODEFI モデルの研修の特徴と効果

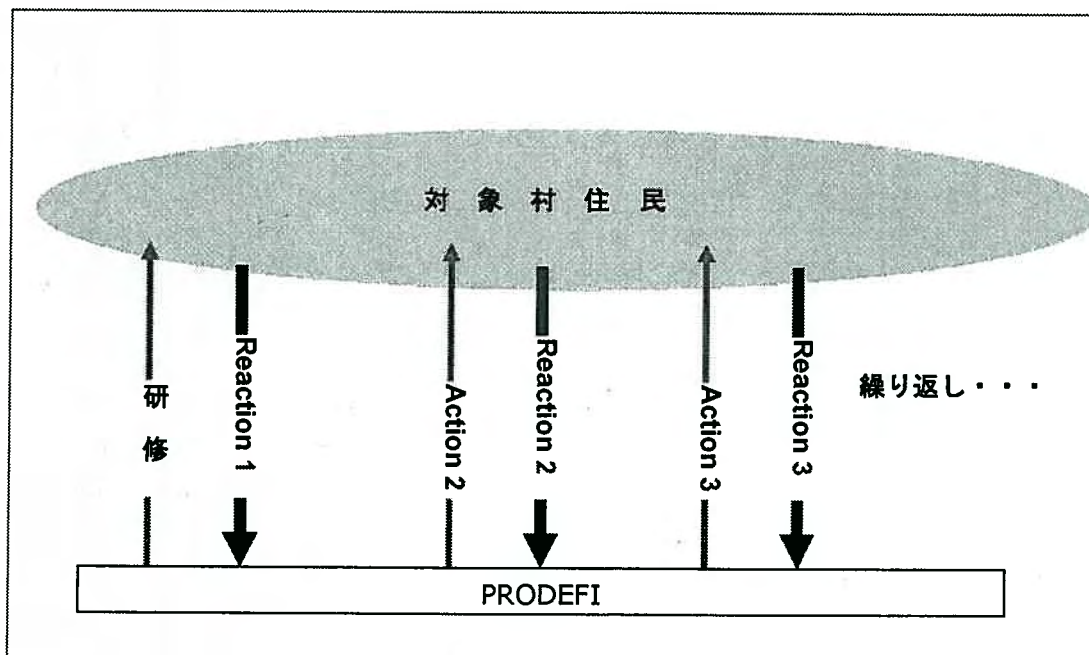
PRODEFI モデルの主要活動は、「PRODEFI 研修」と呼ばれる研修活動です。この章では、PRODEFI 研修を中心にモデルの特徴と効果を述べたいと思います。

PRODEFI モデルの特徴とはどのようなものでしょうか？

- ・ まず、研修という形で、対象地域へのインプットを開始する
- ・ 地域のニーズに応えた研修を地域の資源を活用して、参加者を選別せずに多数を対象として村で実施する
- ・ インプットに対するリアクションを見て、次のインプットを検討する

PRODEFI モデルの始まりは、研修です。PRODEFI では、研修を、「住民－講師間、住民間の情報・知識・技術のやり取りの場」と考え、対象村へのインプットを、プロジェクト－対象住民の相互作用で作り上げる研修という形で開始します。PRODEFI モデルの研修を、これ以後、「PRODEFI 研修」と呼びましょう。

図3-1 PRODEFIモデルの概念図 その1



3-1 PRODEFI 研修の特徴

PRODEFI 研修には以下のような特徴があります。

1. 住民のニーズ・要望に応える「あなたの村の研修」
2. 地元の講師、地域にある教材を活用する「地域密着型研修」
3. 村でその村の住民を対象に実施する「気軽な研修」
4. 誰でも参加可能な「私にも参加できる研修」
5. 村の多くの住民が参加する「みんなの研修」

3-1-1 「地域のニーズに応える」⇒住民のニーズ・要望に応える「あなたの村の研修」

PRODEFI 研修では、村を基点として、まず、研修に結び付けられる村のニーズを把握し、それを研修テーマに転換します。井戸や堰堤などの小規模インフラ建設の要請も、施設そのものの投入を第一に考えるのではなく、「井戸掘りの研修・実習」、「小堰堤や石積み作りの研修・実習」という形で、住民に提供することを原則とします。

3-1-2 「地域の資源を用いる」⇒ 地元の講師、地域の教材を活用する「地域密着型研修」

PRODEFI 研修では、研修講師を始めとするリソースパーソンは、地域のネットワークを活用し、まず、活動実施村の近隣の住民の中から探し出します。地元に住む研修講師は、地元の状況をよく知っていますので、より地域のニーズに即した研修実施につながります。

教材も「村にあるもの」を最大限活用し、研修後に、住民が研修で得た技術や知識を活用・実践するために必要な最低限の外部資源（道具や原材料など）を研修教材として導入します。人や物など地域の資源を活用することで、研修コストが削減できます。住民にとっても、研修終了後、「研修中に習ったこと」をスムーズに実践に移すことが可能となります。また、研修講師が近隣に住んでいるため、研修後のフォローアップも簡単ですし、住民－研修講師間のネットワークの構築の可能性も生まれます。

3-1-3 「現地で実施する」⇒ 村でその村の住民を対象に実施する「気軽な研修」

基本的に、村レベルでその村の住民を対象に研修を実施します。「村での研修」は、実施者にとっては、「研修場所の借り上げが不要」、「参加者の交通費や滞在費などが不要」になるため、研修コストの低減につながり、住民にとっては、村や家を不在にする時間が短くなるために、研修に参加しやすくなります。PRODEFI モデルの「村での研修」は、実施者にとっても参加者にとっても「気軽な研修」となります。

BOX 1 地域の講師採用だからできた、不測の事態への対応

地域の研修講師を雇用したおかげで、不測の事態に対して柔軟な対応ができ、研修実施者にとっても研修受講者にとってもダメージが最小で済んだ例である。

フィムラ地区のジロール村では、研修が数回にわたって延期された。PRODEFI の研修開催が予定されていた日に、他の援助機関が日当(1500Fcia/日)を出して地域住民を作業に動員したため、村の女性グループリーダーが、隣村に住む研修講師に研修延期を依頼した。しかし、一日だけの予定で始まった作業は終わらず、あと一日、あと一日と三度も延期され、準備に尽力していた講師陣(計4人)は落胆し、開催を懸念し始めた。しかし、PRODEFI はこの依頼を逆に女性グループの研修ニーズと受講意欲の表れと歓迎し、講師陣にスケジュールを調整し、開催を延期するよう依頼した。なぜなら、参加費も食事もない研修の延期を依頼するのは、住民が研修内容そのものに興味があると判断したためである。講師は、結局、女性グループリーダーや援助機関と数回の打合せで日程を調整した上で実施にこぎつけ、研修は盛況に終わった。

このような不測の事態の際も、地域の人材を活用し村で開催したからこそ、柔軟な対応が可能となり、ダメージを最小に抑えることができる。これが従来のように大都市の研修センターに受講者を招待して行う研修であったなら、対応がつかなかったであろう。通信事情の悪いジロール村の受講希望者が事前に講師に連絡を取れる可能性も低い。また、外来講師を雇用していれば、講師を研修実施地に3日も足止めした上に研修を中止し、あらためて研修実施を依頼しなくてはならず、余計なコストが発生する。そして、ダカール在住のプロジェクトメンバーや外来講師が、日程調整のためにジロール村の女性グループや援助機関と数回の打合せを持つことも困難である。さらに、連絡がつかない場合、女性グループは受講意欲がないとみなされる危険がある。

これらのマイナスの影響を小さく抑えられたのも地域開催であればこそといえよう。

3-1-4 「参加者を選別しない」⇒ 誰でも参加可能な「私にも参加できる研修」

PRODEFI 研修では、研修参加者を「選びません」。その研修に参加したい人で、参加可能な人は、誰でも参加できます。通常、研修を実施する際には、「XX村では、00研修の参加者△人を選ぶ」、「▲▲研修には各グループのリーダーが参加する」など、研修実施者が、研修の実施形態やテーマにより参加者を選別、あるいは、村に選別を依頼するケースが多く見られます。これでは、研修テーマへの関心度や研修への参加意欲に関係なく、「リーダーである者」、「研修に関する情報を入手できる者」に研修参加の機会が集中することも考えられ、結果として、同じ人物が繰り返し、異なる研修に参加するような事態も起こりうるわけです。そして、研修後の習得技術・情報の活用や実践、普及は、選別された少数の参加者次第ということになります。

参加者を選ばない PRODEFI 研修には、テーマに関心のある人はもちろん、「ちょっとおもしろそう」という興味本位の住民でも参加できます。これまで、研修は「選ばれた人のもの」と思っていた大多数の住民にとり、PRODEFI 研修は「私にも参加できる」研修なのです。

BOX 2 選択型研修についてのメディナ・ンダウエン村住民の見解

村から数人を選び行われる研修では、出席した人が、村に戻り研修で学んだ内容を伝えるために、人を集めることも、話を聞いてもらうことも困難である。そして、数人しか選ばれないことによって、村内に混乱が生まれる。また、研修を受ける人が数人だけでは村全体の開発へは発展していかない。

3-1-5 「多数を対象とする」⇒ 村の多くの住民が参加する「みんなの研修」

「参加したい人は、誰でも参加できる」の原則に則り、希望者があるかぎり、PRODEFI 研修では、同じ村で、同じテーマの研修を繰り返し行います。このため、1つの村で、同じテーマの研修参加者の人数が多くなり、技術の実践度や普及度が高くなることも容易に想像がつかます。PRODEFI の研修を通じて、住民個人の情報量や技術的選択肢が広がるばかりか、皆が参加できる研修であることから、集団での情報量や技術・活動面での選択肢も拡大し、その結果、個人、集団での活動の活性化につながります。



PRODEFI 研修は、「私にも参加できる研修」

3-2 PRODEFI 研修の効果

PRODEFI 研修を実施すれば、どのような効果が得られるのでしょうか？

3-1-1～5 の特徴を備えた研修を実施することにより、従来型の研修*に比して、ローリスクで大きな効果をあげることができる

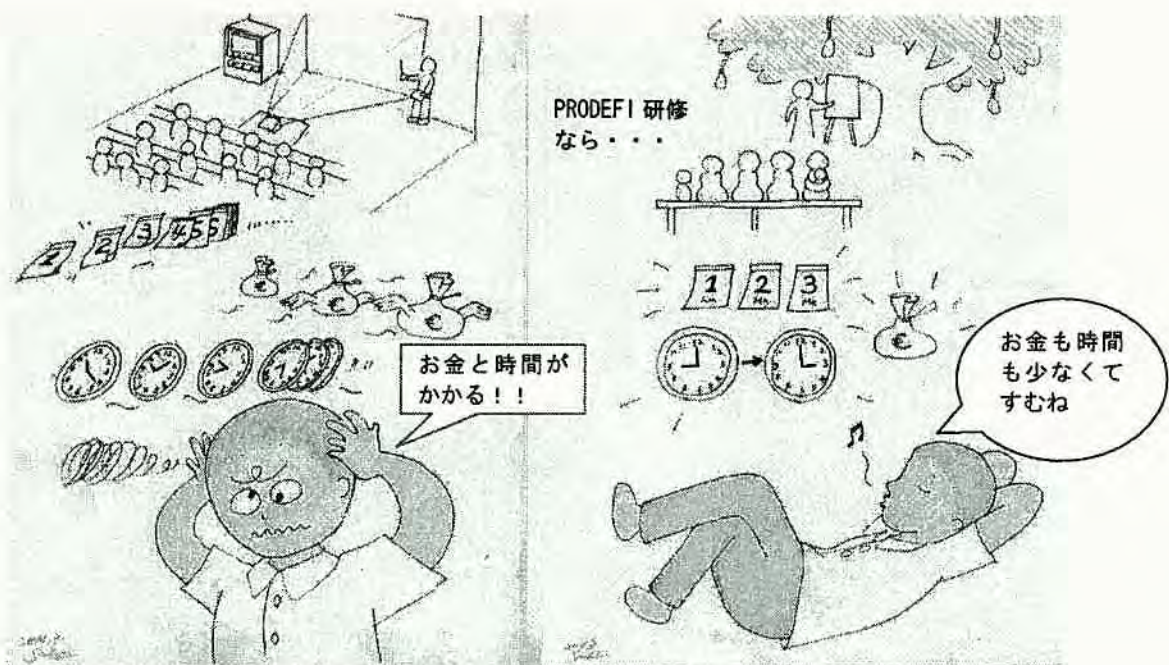
*従来型研修：セネガルで広く行われているタイプの研修で、プロジェクト対象地域の全村、あるいは、数村の選別した住民を、中心村や近隣のコミュニン、研修施設に集め行う（詳細は3-3参照）

3-2-1 ローリスク⇒「低インプット」で研修実施にかかる「時間が短い」

「地域の資源を活用する」、「現地で実施する」PRODEFI 研修では、従来型の研修と比較して、研修1回にかかる費用、参加者あたりの研修費用が、非常に低く抑えられます（3-3参照）。このため、同額の資金で賄える研修の回数、参加者数が多くなり、研修で習得した技術・情報を活用する参加者の数も増えます。

また、実施者、参加者間の情報の交換・取りまとめ（「どの村から何人、誰が出るのか」など参加者選択と参加者への報告に関わる作業）や研修場所の手配等に係る仕事量が減り、短い準備期間で1回の研修を実施することができます。

通常、プロジェクトには時間・資金の面での制約があり、PRODEFI 研修ですと、予想通りの効果が得られない研修があったとしても、金額的損失が少なく、繰り返しやり直す時間的余裕もあるため、研修実施者にとり、リスクは低いものとなります。



大きな研修（左）と小さな研修（右）

3-2-2 大きな効果⇒「研修実施者の立場」と「住民の視点」から効果が確認された

研修により期待される具体的な効果とは何でしょうか？ 研修は技術や情報を提供・交換する場と考えられますので、研修後、その情報や技術が参加者である住民に活用されるかどうか、また、研修に参加していない住民にもその技術が伝わっているかどうか、まず、その効果を計る上で、重要な指標となってきます。これらの効果は、実践者数を数えるなどし、定量的に測定できるものですが、直接、数量では表すことのできない効果もあります。PRODEFI研修の実施後には、実践率や普及率など数値に置き換えられる効果に加え、住民の考え方や行動の変化等に関わる効果も多く報告されています。

以下に、PRODEFI研修の効果を、参加者である「住民の目から見たもの」と、実施者である「プロジェクトの立場から見たもの」に整理しまとめます。ここに挙げた効果は、いずれも、すでに対象地域で、観察されたものであり、決して、机上の空論を述べているわけではありません。

住民の視点からの効果

1) 「私も研修に参加できてうれしい」

PRODEFI研修には誰もが参加できるため、これまで研修には縁がなかった人々も多く参加しています。それらの人々にとり、研修に参加することは、「本当にうれしい」ことであり、参加者としての意識や意欲も高揚します。多くの住民の「うれしい」という気持ちは、何か新しいことを始めるきっかけとなり、個人で、村全体で、様々な活動を生み出す活力になると考えられます。実際に、PRODEFI研修の対象村では、新しい何かを始めた住民や住民組織があり、この資料の中にも具体例をいくつか紹介しています。



「私も研修に参加できてうれしい！」



「私も研修に参加できてうれしい」

2) 「住民間での情報交換が活発になった」

PRODEFI で行っている村での研修そのものが、住民にとっての情報交換の場となりますが、住民間では、研修後も研修テーマや研修そのものに関する情報のやりとりが活発に行われています。例えば、居住区の違いなどの理由で、余り行き来のなかった異なる民族の女性達が、「PRODEFI 研修」という共有の場・体験をもつことで、互いのコミュニケーション密度を高め、協働や連帯の精神を強める結果になりました。活性化したコミュニケーションが、さらに、他の活動を生み出す母体となっているというわけです。

3) 「私達にも決められる」

2) の活性化されたコミュニケーションの下地に加え、PRODEFI 研修により、村の住民が1箇所に集まることが多くなります。その場では、グループのこと、村のことも自然に話されるようになり、何らかの意思決定につながる場合もあります。多くの住民が集まる村の苗畑や女性達の社交場である共同の野菜畑が、PRODEFI 研修で習った技術を実践する場であると同時に、住民の協議の場になっています。

BOX 3 皆で話し合うこと

PRODEFI 対象村のパウー村では、広場(Place publique)が村民達の協議の場であり、以前は、村長や長老など限られた住民以外は、その協議に参加することはなかった。PRODEFI の村民苗畑に多くの住民が作業をしに集まるようになると、苗畑自体が、苗畑の管理や共同の野菜栽培など村全体に関わる活動を協議する場となっていく。苗畑には誰もがアクセス可能であり、「みんなが参加できる協議の場」が、村に新たに誕生したことになる。

住民が自分たちで何かを決め実行した例として、クール・ワール村の住民たちが、「野菜栽培を行うのに貯水槽があればいい」と考え、みなで話し合い、自分たちが中心になって貯水槽を建設したことが挙げられる。



「みんなで楽しく実践」 村の野菜畑が女性達の社交の場、意見交換の場となっている



「私達で、貯水槽を作ろう！」

4) 「個人、グループ問わず実践できる」

PRODEFI 研修には誰でも参加できるので、研修ののち、同じ研修を受けた参加者が集まりグループで実践に移すことも可能ですし、個人で実践することも可能です。つまり活動の種類やその制約条件、各自の好みで、集団で実践することも、個人で実践することもできるのです。逆に、既存のグループのメンバー全員が、同じ研修を受講することも可能であり、皆で同じ知識・技術を共有、実践することでグループ活動の活性化にもつながります。

5) 「研修で習ったことが、簡単に確認できる」

PRODEFI 研修には多くの住民が参加できるので、一人の参加者の身近に他の参加者がいることになり、研修後、住民間で習ったことの相互確認が簡単にできます。また、研修欠席者が、出席者に研修内容を聞くことも容易です（回りに多くの参加者がいますので）。加えて、講師は地元の人ですので、研修後、講師による住民の実践の確認に要する時間やコストも少なくすむことは言うまでもありません。

6) 「住民間に良い刺激が生まれた」

PRODEFI 研修対象村では、同じ研修への参加者数が多いため、村のあちらこちらで、苗畑作りなら苗畑作り、野菜栽培なら野菜栽培と同じ活動に取り組む住民が出てきます。自分と同じ活動を隣人が行っているのであれば、「となりはどんな具合だろう？」と自身の活動と比べたくなるのが人間です。そこに、いい意味での競争意識が芽生え、PRODEFI 研修の実践の成果を競い合うことになり、個人やグループ間により刺激が生まれます。

BOX 4 皆で実践すること

PRODEFI 対象地区のフィムラ3村では、ビーズ細工や染色、野菜加工の研修の後に、参加者達が定期的に集まり技術を実践している。研修から1ヶ月半の間に行われた共同作業の回数は、ジロール村でビーズ1回、染色3回、加工1回、フィムラ村では染色3回、加工3回、ヤエン村でビーズ5回、染色4回となっている。参加者も、研修期間中の技術の習得度合いに個人差があったとしても、共同作業を通じて、互いに教えあい、補完しあうことができると、共同作業の有用性を感じている。また、個人でも作業が可能なビーズ細工では、女性達が、流行や各自の好みを取り入れたアイデアを出し合い、研修では習わなかった細工の作品を作り上げ、互いに品評しあい、競い合う光景も見られる。

いずれの村でも、共同作業が行われるのは、広場や公共施設といった、公共の場であるので、他の住民の興味を引きやすい。その結果、毎回、その場に研修に参加しなかった住民が加わっており、参加者から他の住民への技術の伝達が活発に行われている。また、同じ家に住む女性のうち1名が研修に参加し、帰宅後、他の女性に研修技術を伝達するという家族間での技術の伝達も行われている。



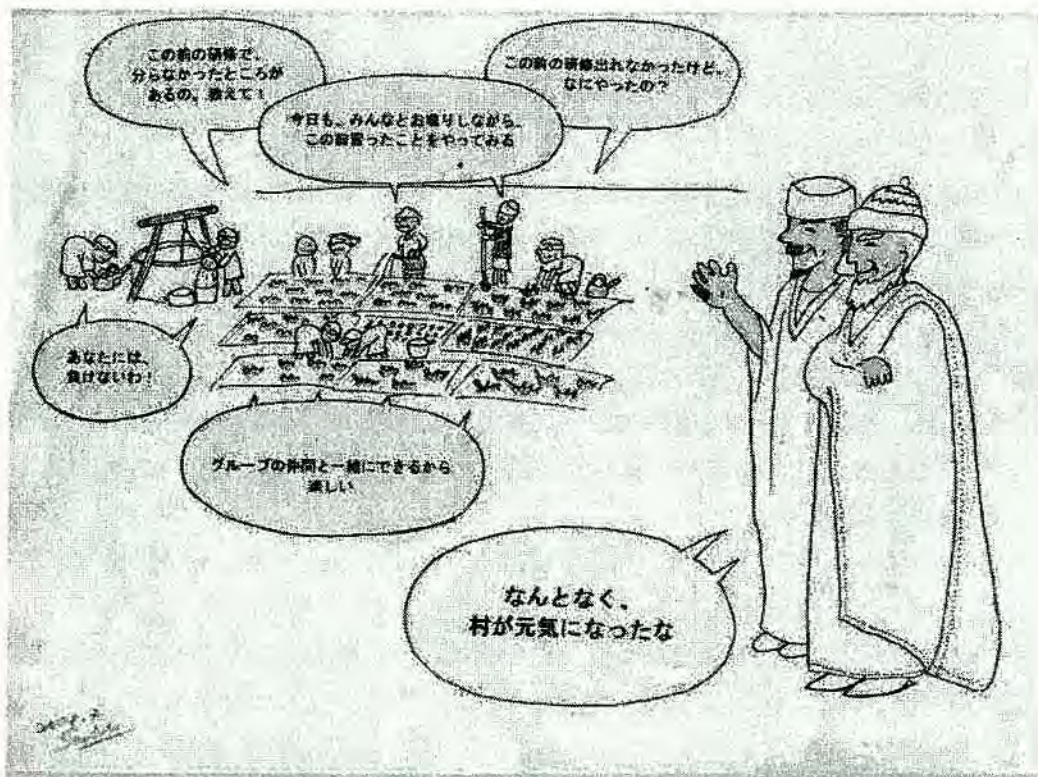
「私達、ビーズ作りに夢中です」



「野菜加工」研修での1コマ

7) 「村全体が元気なる」

住民の多くが同じ知識や技術を共有し、住民間のコミュニケーションが活発になることで、住民の集まりである村自体が活性化してきます。PRODEFI 対象地区では、「PRODEFI が始まり、何が変わったか」という問いに対し、多くの住民が、「住民間の連帯感が強まった」と答えています。さらには、住民自身の口から、「眠っていた村人を PRODEFI が起こしてくれた。自分たちの社会を見つめなおし、活動しようとしているところだ」、「PRODEFI が、病気だったことにも気づかなかった私達を、病気に気づかせてくれて、治してくれ、私たちは、今、健康で歩けるようになった」などの頼もしい意見も聞かれるようになりました。



「村全体が元気になる！」PRODEFI 研修

実施者の視点から見た効果

1) 研修後の実施率が高い

研修実施者にとっては、研修で習得した技術を住民が活用するかどうか、まず、気になるところです。PRODEFI研修参加者のうち、研修終了後に研修で習得した技術を実践する者の割合は非常に高いことが確認されました。研修参加者を対象としたサンプル調査¹では、研修終了後、「個人で実践」する場合は、18%（染色）～85%（植林）であり、実践率はテーマにより大きく異なりますが、「集団で実践」の場合は、全テーマで実践率が90%を超えています（添付資料 表1参照）。この高い実践率は、PRODEFI研修が、住民のニーズを踏まえていること、村で実践可能な活動を提案していることに加え、「住民の視点からの効果」にありますように、「研修に参加できてうれしい」気持ちから生まれる意欲や「みんなで実践でき、教えあったり、刺激しあったりできる」環境を生み出していることに起因するものと考えられます。

2) 研修後の普及度が高い

続いて、研修実施者が注目するのは、研修時に参加者に提示した技術や情報が、参加していない他の住民へも伝わっているかどうかではないでしょうか。PRODEFI研修では、他の住民への伝達の度合いも高いことが確認されています。上記調査の回答者のうち8割弱の人が、「研修に参加しなかった人に、何らかの形で研修の内容を伝えた」とし、約2割の人が「その研修には参加しなかったが、実践を試みている」と答えています²（添付資料 グラフ1参照）。つまり、多くの研修参加者が口頭や実践を通じて他者に研修内容を伝えようとし、研修に参加していない住民の中からも実践者が出てきているということです。普及度の高さも、「住民の視点から見た効果」から説明でき（BOX4のフィルムラ地区の例など）、研修への参加者が多く、実践者が多ければ、（他の住民への）普及速度も人数も大きいことがわかります。

BOX 5 おじいちゃんのカーニ

マンビ地区のクール・ワール村での普及の事例である。家の近くでトウガラシを栽培し、収入を得ている野菜栽培研修に参加した若者の様子を見たことがきっかけで、初めての乾期の野菜栽培に取り組んでいる男性がいる。クール・ワール村のトウルカ族で80歳くらいのスレイマン・ディオップ氏は、家の裏でカーニ45本の栽培を2003年11月から始めた。彼は野菜栽培の研修には出席していない。彼は、すでにかかなり高齢なので、家畜と子どもたちが入ってこないように監督するだけで、実際の農作業は、野菜研修に参加した彼の息子が担当している。

¹ 2004年4～5月にPRODEFI松谷短期専門家により、2つの対象地区（マンビ、フィルギ）の7村で、PRODEFI研修参加者の中から30サンプル/村を選び（計210サンプル）、行われた質問紙調査の結果。

² 研修に参加しなかった住民のうち、参加者をコピーし個人で実践した者のみで、集団で実践した者は数えていない。

BOX 6 家族で実践・事業所で実践

いくら受講者を選別しない、地域で開催すると言っても、希望者のだれもが都合よく、研修に参加できるわけではない。しかし、身近な誰かが研修に参加すれば、周囲の住民にもその技術を学ぶチャンスが生まれる。

研修に参加したデニ・マリク・ゲイ地区のデニ・ユスフー村では、苗木生産研修に参加した父が、研修後、自分の息子のうち13歳と14歳の二人に、研修で学んだ技術を伝達し、自分の農地の一角をこの二人に責任を持たせて任せている。

また、デニ・ババカール・ジョップ村では、野菜栽培研修と養鶏研修に参加した農家兼養鶏家が、自分の使用人たちに研修で学んだ技術を伝達した。使用人たちの野菜栽培技術は向上し、この農家の収穫が増えた。また、以前は高かった鶏の死亡率が、研修技術を適用後低減した。

フィルムラ地区のフィルムラ村では、家事の担い手である家族の母と娘が、二人とも研修への参加を希望していた。この母娘は相談して役割を分担し、母が研修に参加し娘が家事を担当した。母は帰宅後忘れないうちに娘に研修で学んだことを伝えると張り切っていた。

3) 周辺への普及の下準備ができる

さて、対象村・地域で技術や知識がある程度普及したと判断されると、次に、研修実施者としては、周辺地域への同じ技術・情報の普及を考えます。PRODEFI 対象地域の周辺村では、すでに、PRODEFI 研修への要望が高まっており、住民はその実施を待ち望んでいる状態です。

従来、農村部では、親戚付き合いや冠婚葬祭などで近隣村との行き来が盛んであるため、PRODEFI の村にも近隣村住民が頻繁に訪れます。他村の住民は、PRODEFI 村の住民の口からPRODEFI のことを聞きますし（8割近くの研修参加者が他の人に研修について話しているという事実）、これまでなかった共同の野菜畑や石積みに興味をひかれます。また、その村で作られた野菜や石鯰を買う機会もあるでしょう。このように、周辺村住民は、PRODEFI の村で新しい活動が始まり、石積みが土壌浸食を食い止める、栽培した野菜を女性達が売っているなど「目に見える効果」を目の当たりにすることになります。そして、そのきっかけがPRODEFI 研修であることを知り、「自分たちにも研修を」と望むようになるのです。

PRODEFI 研修で行った「苗木生産」や「野菜栽培」に関しては、近隣村の住民が、対象村に来て、「自分にも教えて欲しい」と研修参加者に頼み、その場で、住民どうしのミニ講習会が開かれるという事例も報告されています。逆に、対象村の住民に「自分たちの村に講師としてきて欲しい」との依頼もあるようです。これらの事例より、周辺村の研修に対する期待の大きさが伺えると同時に、住民間での技術普及の下地も出来上がっていることがわかります。

BOX 7 周辺地域の PRODEFI 研修に対する期待の高まり

ニョロ地区にある PRODEFI 対象村クール・ワール村の男性は隣村の男性グループに対して 3 日間の野菜苗床の作り方を伝授するために実演講習を行っており、メディナ・ンダウエン村の女性グループも隣村の女性グループから「野菜栽培の実習を見学したい」との申し出を受けている。また、PRODEFI 対象地区の近隣村であるブドゥック村では、村長が、ある住民に石積み工法の技術を習得してくることを命じ、パウー村住民がその村を訪れ、同技術の指導にあたる予定である。

フィムラ地区では、PRODEFI 研修の成果品であるピーズ細工、染物、野菜加工品を、自分たちの村で売るばかりでなく、研修参加者が近隣村に行く際に持参し、販売に努めている。売り手が、「これらの製品は、PRODEFI 研修で習って、自分たちが作った」と言うために、周辺住民の PRODEFI 研修に対する興味を高める結果となっている。

3-3 選別型研修との比較

ここでは、PRODEFI 研修と、一般に広く実施されている研修との簡単な比較をしてみましょう。まず、皆さんがこれまでに参加したことのある、あるいは、実施したことのある住民対象の技術研修を思い浮かべて、以下の表に書き込んでください。

表 3-1 私の参加した／実施した研修

	参加／実施した研修
研修場所	
研修講師 (どこから招聘したか?)	
参加者 (何村から?どのように参加者を選んだか?)	
1村ごとの参加者数	
必要経費 (項目を記述する)	
研修後の効果 (技術は実践されているか? 他の住民への普及は?)	

これまで一般に行われてきた研修の最大の特徴は、「参加者を選別する」ということです。このタイプの研修は、往々にして、プロジェクトの対象地域や対象数か村から、テーマ毎に選別した参加者を、中心村や近隣のコミュニティ（施設）に集め実施されます。このタイプの研修をここでは、「選別型研修」と呼ぶことにしましょう。

BOX 8 同じテーマの研修の費用と効果の比較

選別型研修

3日間の植林・苗生産研修を、プロジェクト対象村9村の住民代表20人を近隣の中心村に集め実施した。講師として近くに住む農村普及センター(CERP)森林官を雇用した。総支出は、参加者の交通費や滞在費を含め総計27万CFAであった。研修終了後、国家的行事である「植林の日」の村をあげての植林や、プロジェクトで作った共同苗畑以外には、個人やグループでの植林や苗生産は見られなかった。

PRODEFI研修

3日間の苗畑研修を12の対象村で実施した。講師をCERP森林官に依頼し、平均参加者は40名/村で、1村あたりかかった研修費用は9.3万CFAであった。12村中7村で実施した参加者に研修後の実践をたずねる調査(訳注1参照)の結果、半数以上の者が、苗生産を個人で実施しており、集団では、ほぼ全員が実践していることがわかった。

- > 2つの研修の参加者一人当たりの研修費用はいくらですか？ どうして、そのような差がでるのですか？
- > 2つの研修の効果を比べてください？ どうしてそのよう違いがあるのでしょうか？

BOX 8の選別型研修の場合、1村あたりの平均参加者数が2～3人となり、少数の参加者にインプットを集中させています(参加者一人当たりの研修費用は13,500 CFA)。この少数の参加者が村に戻り、研修で取得した技術や知識を実践する、あるいは、他の住民に伝えることは、実施者がそれを一方的に期待しているだけで、確約はされていません。「選別された」参加者が、常に、研修テーマの技術・知識の習得を必要とし、それを実践に移すとは限らないからです。彼らを実践すると仮定した場合でも、2～3人/村の割合では、他の住民への普及には限りがあるでしょう。

同じ研修テーマのPRODEFI研修の場合は、1村あたりの参加者数が40名で、1人あたりの研修費用は2,325 CFAと非常に低く抑えられます。そして、3-2の「住民の視点から見た効果」で述べたような住民の意欲を掻き立てる仕組みに加え、研修中に行う実習の場(例えば苗生産や植林)が、自分たちの村の中にあるので、研修終了後も、同じ場所で、参加者がスムーズに実践を継続し、研修に参加しなかった住民も、その場に来れば、技術を習得することができるのです。

図3-2からもわかるように、村で実施され誰でも参加できるPRODEFI研修は、選別型研修と比して、村内の「参加者密度」が大きく、「参加者間」、「参加者-参加しなかった住民間」の相互作用も多くなります。この活性化された住民間の相互作用が、技術の実践や普及の推進力になるばかりではなく、グループや村の活動を活発にする要因となっているのです。

図3-2 選別型研修と PRODEFI 研修における住民間の相互作用の比較

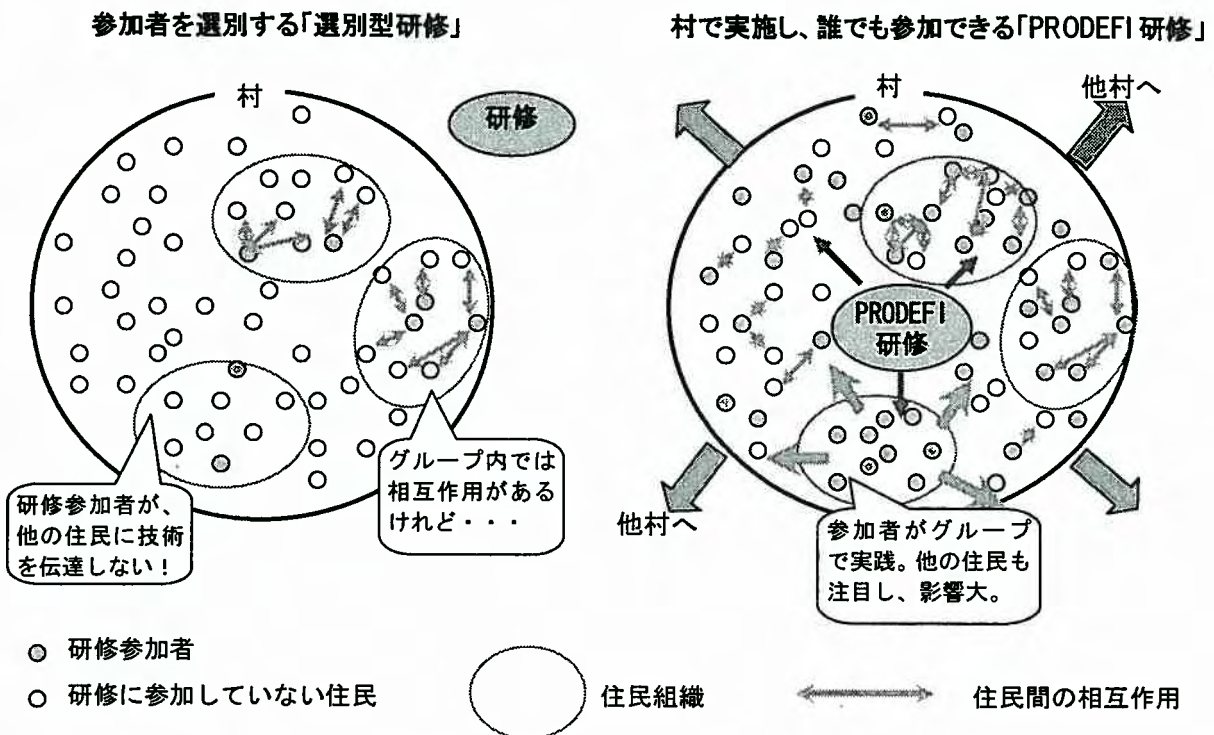


表3-2 選別型研修と PRODEFI 研修の比較のまとめ

研修	選別型	PRODEFI
研修場所	中心村 近隣コミュニンにある研修施設	対象各村
研修講師	対象地域からの場合もあるが、ダカール等の都市から招聘する機会が多い	対象地域内に在住する講師を優先的に雇用
研修参加者	研修実施者側の選定基準に沿って、対象地域内の複数村で選別された参加者	各対象村でその研修に参加したい人(周辺村住民が参加する場合もあり)
1村あたりの参加者数	2~5人/村	約37名/研修*
必要経費 (教材以外)	講師に支払う謝礼や日当・宿泊・交通費(遠方よりの招聘なので高い場合が多い) / 参加者に支払う宿泊・食事・交通費 / 研修施設の賃料・・・	講師への謝礼と交通費
研修後の効果	実践は少数の参加者に限られる場合が多く、参加者以外への普及も少ない	これまでに見てきたように、実践率も普及度も高い

* 2004年4月までに PRODEFI が実施した研修のテーマ/村ごとの研修参加者数の平均